

東北教区被災者支援センター

堀田 暢（東北教区被災者支援センタースタッフ）

東北教区被災者支援センターは2011年3月14日の設立より今日まで、仙台、石巻の二つの拠点において、それぞれの地域に合わせたボランティアワークを展開しています。クリスチャンのみならず、インターネットを通して私たちの活動を知って参加されるノンクリスチャンがほとんどです。

“地域の方がたの心に寄り添う”、という姿勢を大切にしています。一方的な支援ではなく、“支え合い”であるということを前提にしています。2月末日時点で約1,700人のボランティアワーカーが当センターの働きに加わって下さっています。その一人ひとりの力はそれほど大きなものではありません。ですが、その一つひとつの小さな力が幾重にも重なって、わたしたちの一年間の活動の成果をもたらしているのです。

わたしたちは、被災されたお一人お一人のそれぞれのお気持ちに寄り添いたいと考えています。それには、被災された方がたを“被災者”、と一括りにしないことが前提条件です。そのためわたしたちは、たくさんのワーク先があるなかで、そのそれぞれに見合った働き方を模索しながら活動しています。わたしたちの助けを必要として下さっている方々には、それぞれのニーズがあります。ですから、わたしたちは“ニーズの先読み”をしないのです。震災当日のことや、その後が続いた辛い日々のことを振り返っては心を痛み、津波により被害を受けた畑で野菜が採れたり、9ヵ月ぶりに自宅に戻ることが出来た折には、自分のことのように喜ぶのです。

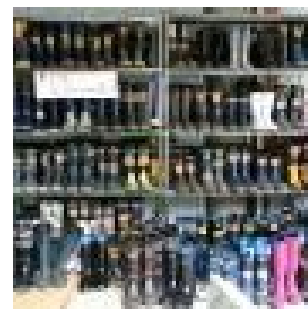
ボランティアワーカーはそれぞれ、異なる背景を持っています。生まれ、住まい、職業、立場、動機などはすべて異なります。しかしながら、それぞれが“被災地”を訪れるにあたり、備えている志はたった一つしかありません。皆、大きな志を持っているのです。そのような人びとの群れであるからこそ、小さくはあれども嘆き悲しむ人びとの支えになることが出来るのです。逆に、大きな志を持つがゆえにそれが過ちや空回りを引き起こすこともあります。自分自身に対する自信が大きすぎたり、“みじめな人びとを助けてあげる”という、非対等的な態度をとってしまいがちなのです。

また、そのようなボランティアワーカーの、いわゆる“やる気”が作業の効率性のみを求めさせることがあるのです。震災を実体験し、避難生活を送り、元の日常を取り戻すことに努めておられる方がたの生活は激動なものです。ですがそれも、2011年3月11日以降の日常であることには変わりはないのです。ですから、一つのある期間を震災ボランティアに費やそうと訪れるボランティアワーカーとは事情が全く違うのです。ボランティアワーカーは、そのワーク先の方の“ペース”に合った働きが求められるのです。それが、当センターで大切にしていることの一つである、“スローワーク”です。

仙台にある東北教区センター『エマオ』に拠点を置かせて頂きながら、14kmほど東に位置する若林区の主に荒井・荒浜地区の笹屋敷という集落にて活動しています。基本的に、その距離を自転車で移動しています。自転車で通うことには大きな意味があるのです。被災した街並みを肌で感じる事が出来るのです。空気感はもちろん、汚泥の匂い、風の音を感じる事が出来るのです。そこ

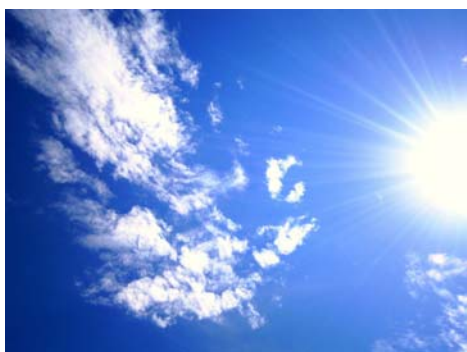


から多くのものを感じ取り、ワークに備えることが出来るのです。また、14 kmという短くはない移動ですから、ワークをする前から汗を流し、体を疲れさせます。それにより、“よそ者であるわたしたちが、自分たちも労をして、その地域にお伺いする”、という、言わば“へりくだり”の姿勢の表し方の一つになるのです。2月の初頭、笹屋敷町内会よりたいへん有難いお誘いがありました。町内会館の真ん前に、町内会と支援センターで連携して運営する事務所を設けることができたのです。これは、震災ボランティアに対するのみならず、町内会の将来設計にまで活用されるでしょう。



夏の終わりに石巻にも拠点を与えられました。震災当初から、石巻での活動を展開してはいましたが、本格的な拠点を置くことが出来たため、ボランティアワーカーの派遣と滞在の便が良くなりました。石巻では仙台よりも広範囲にワークを展開しており、その地域によってもニーズや、被災された方々の抱える問題も様々で困難なところも多々あります。しかし、拠点は一軒家を用いているため、スタッフとボランティアワーカーが一体となって日々を過ごすことが出来ます。また、石巻では他の支援団体も多く活動しており、その間における連携も図ることが出来、協力体制を築くことができています。やはり、仙台から離れれば離れるほど、支援の手から遠ざかるように見えます。そのため、石巻には未だ撤去されないがれきも多く見られます。

震災当初から数か月間、それは春でしたから、次第に暖くなる時期でありました。そして夏になり、炎天下でのワークは休憩を多く設けないといけませんでした。だんだんと日が短くなり秋になりました。11月にもなると朝晩の冷え込みが厳しくなり、寒い冬を迎えました。どの季節にも、それぞれに見合った働きが与えられました。その季節にしかできないこと、その季節にはできないこともありました。同じように、まもなく迎える春には、二年目の春に見合った仕事が与えられるでしょう。



寒い冬を越して仮設住宅から自宅へ戻ろうとされる方、農業を再開される方、そのそれぞれに寄り添うための働きがあるでしょう。暑くなれば、手を掛ける者がなくなった農地に草が生い茂るでしょう。するとわたしたちがその代わりを担えるでしょう。秋を迎えると、野菜の収穫も始まります。そのお手伝いも、震災を通して出会ったこの地の人びととのつながりによって為し得る業です。共にクリスマスやお正月を迎えられるというのも、この震災がなければありえなかったことでしょう。

そうして、一年、二年で終わるのではなく、単なる震災ボランティアで終わらせてはならないのが当センターでの働きです。笹屋敷町内会との連携は、これをはっきりと示してくれています。がれきが片付いたから、畑の汚泥が取り除かれたからと言って撤退しない。五年後、十年後と、“震災の前よりも明るい街にしたい”、それが、地域の人びとの声です。

“ボランティアは自己満足だ。”、とよく言われます。それは確かなことです。ボランティアに参加する動機は人それぞれです。しかし皆、自分に跳ね返ってくるものを想像し、期待しているところがどこかにあるのです。そうでなければ、見ず知らずの人を助けようとは思いません。ただ、下心は持ってはいけません。第一に、“自分が必要とされるのだろうか。”、という疑問は持ち続けることです。それを模索しながら、想像力を豊かにするのです。すると何か浮かんでくるはずです。それが何かは人それぞれです。せつかく遠いところからボランティアへ出向くのです。何か一つでも、“ついでに” 手に入れて帰ってもいいのではないのでしょうか。